

Title	和辻哲郎著 日本古代文化
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.4 (1921. 4) ,p.588(160)- 589(161)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210401-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

And what wealth then shall left us when none shall gather gold
To buy his friend in the market and pinch pine and the sold?

(高橋誠一郎)

和辻哲郎著 「日本古代文化」

岩波書店發行
四六版四七六頁
定價貳圓五拾錢

最近日本の文化に對して種々なる歴史的研究の數多發表されるのは吾人の最も愉快に感ずるところである。素より本書は唯古代一般に對する觀察であつて、嚴密な意味で歴史であるとは云へない。然し其の研究方法として人類學考古學言語學等に基礎を置いて上代日本人の文化を明かにせんとするのは、最近かの H. G. Wells が其の著 "Outline of History" に於いて試みたるものと同じく、又其の文體も共に流麗、"It is written plainly for the general reader, but its aim goes beyond its use as merely interesting re-

ading matter" (Outline of History, p. 1) である。故に本書は寧ろ専門的の歴史としてではなく、一般的讀物として歡迎されるべきものであらう。本書の内容は殆ど全部の三分の一を占める「上代史概観」以下、「歸化人と上代文化との關係」「古事記の藝術的價值」「歌謠」「音樂と舞蹈」「信仰と神話」「道德思想」「造形美術」の八篇からなる。先づ是等文化の背景として上代史を概観せんとした著者は日本民族の由來から論を起して居るが、其の主たる目的は「佛教渡來以前の文化を古事記日本書紀の傳説歌謠及び同時代の古墳土偶等によつて觀察しようとする」(一頁)にある。而して又著者が最も多くの勞を費したのは「二十幾人かの權威ある専門家の勞作を基礎とした」上代史概観であらう。且つ著者は是等分科の専門家の研究が結局いかなる目的に奉仕すべきであるかを示すものとして本書の意義を認めて居る。(序四頁)

然し本書が多分の藝術的色彩を以つて吾人をして一讀難滞させるやうなことがない代りに、の想像するが如く、決して人類により、大なる幸福乃至文化を齎すものでない事を指摘し、終には民人の不満、自由に對する抑壓より反動革命の慘禍に及ぶ可き」を述ぶるに在る。

文化の歸趨闡明に關しては未だ十分に満足を與へるものと云ふことは出來ない。殊に其經濟的方面に至つては素より困難な問題ではあるが極めて不完全である。勿論古代人の經濟的文化に對して多少の敘述がなくはないが、それは甚だ尠少である。我が祖先の此の方面の生活を一層明瞭にするにあらずんば、日本古代文化の研究として完全なものであるとは云へないと思ふ。

(野村兼太郎)

荒川憲譯 社會主義審判

四六版二二五頁
正價金一圓三十錢
有斐閣發賣

本書は舊獨逸帝國議會自由黨首領オイゲネ・リヒテル氏の原著をヘンリー・ライト氏の英譯 Pictures of the Socialistic Future (一八九三年初版) より譯出せるものである。小説體を以て叙述せられたる本篇の根子は「社會革命が獨逸に勃發したものと假定して、社會主義にして實現せば、果して如何なる状態を現出するかを描寫し、次に此の社會主義實現の曉には社會主義者

の想像するが如く、決して人類により、大なる幸福乃至文化を齎すものでない事を指摘し、終には民人の不満、自由に對する抑壓より反動革命の慘禍に及ぶ可き」を述ぶるに在る。現在に於て描出した將來の状態は矢張り現在の状態である。將來は何人も現在に於て開くことの出來ぬ幽昏神秘の裡に鎖されてゐる。加之ならず、將來を描かんとする一切の計畫は悉くローマンズの性質を帯びてゐる、而して是れ等ものは他日革命に於ける人民の創造力を微弱ならしむ可きの不利益を有してゐると稱せられてゐる。然しながら他方から言へば、具體的觀念は其の實現に先んずるものである。クロポトキンの語を借りて言ふならば、多數の物理學者や技術家が「空氣よりも重い機械を以てする天空征服」のローマンズを其の具體的形態に於て自己の眼前に置くことがなかつたならば、恐らく現代に於ける航空術の進歩は望み得られなかつたであらう。現實は固より小説より奇である。而して苦心慘憺の結果たる豫定の計畫は往々にし